

令和7(2025)年度鳥取県・バーモント州青少年交流事業(派遣)

Tottori Prefecture - Vermont Youth Exchange Program 2025

派遣生徒 レポート



鳥取県

令和7(2025)年度鳥取県・バーモント州青少年交流事業(派遣)

○趣旨・目的

鳥取県と姉妹提携を結ぶ米国バーモント州へ県内の青少年を派遣し、青少年同士の交流を通して、互いの教育、文化、生活習慣等の違いを理解することで、国際的視野を持った青少年の育成及び、両地域の更なる交流促進を図ることを目的としています。

派遣においては、異文化理解をはじめ、自然環境や社会環境の分野から日ごろ興味や関心をもつテーマを生徒自身で設定し、それを念頭に現地で比較しながら疑問点を掘り下げることにより理解を深め、派遣後は本事業の経験を活かし、将来、広い視野をもって鳥取県の持続可能な地域社会づくりへ貢献しうる人物の参加を期待します。

○実施主体・現地受入団体

(1) 実施主体

鳥取県(以下「県」という)

(2) 現地受入団体

バーモント州の非営利団体 Green Across the World(以下「GATW」という)

○派遣期間

令和7年10月10日(金)～21日(火)

○派遣者

計10名

県内高校生8名、引率2名

○派遣者名簿

	学校名	学年	生徒氏名	派遣先高校
1	鳥取東高等学校	1	徳丸 さらさ	バーリントン高校
2	鳥取八頭高等学校	2	山脇 詠士	バーリントン高校
3	鳥取城北高等学校	2	蓑原 わか菜	バーリントン高校
4	湯梨浜学園高等学校	1	井上 葉月	バーリントン高校
5	倉吉東高等学校	1	末宗 とうこ	バーリントン高校
6	米子東高等学校	2	高見 真依	バーリントン高校
7	米子西高等学校	2	堀之内 大都	バーリントン高校
8	米子松蔭等学校	2	圓山 世津子	バーリントン高校
9	引率	-	福田 芽生	
10	引率・通訳	-	ジェイミー・ディン	

○日程概要

	プログラム	宿泊
1日目 (金)	午前 鳥取空港、又は米子空港発 羽田空港よりアメリカへ出発 夜 バーリントン州到着 (バーリントン空港着)	ホームステイ
2日目 (土)	午前 ホストファミリーと交流 夕方 オリエンテーション及び歓迎パーティ	ホームステイ
3日目 (日)	終日 ホストファミリーと交流	ホームステイ
4日目 (月)	終日 セントマイケルズ大学との交流 (大学視察、実験参加)	ホームステイ
5日目 (火)	午前 農場視察 午後 ファイロ州立公園散策	ホームステイ
6日目 (水)	午前 シャンプレイン湖環境調査船 午後 バーモント州施設視察	ホームステイ
7日目 (木)	終日 シャドーイング (高校体験)	ホームステイ
8日目 (金)	終日 キーピングトラック (野外調査)	ホームステイ
9日目 (土)	終日 ホストファミリーと交流	ホームステイ
10日目 (日)	日中 ホストファミリーと交流 夕方 研修発表 送別会	ホームステイ
11日目 (月)	早朝 バーリントン州出発 (バーリントン空港発) 経由地で乗り継ぎ	機内泊
12日目 (火)	午後 成田空港着、夕方 羽田空港発 夜 鳥取空港、又は米子空港着	



セントマイケルズ大学 研究室訪問



歓迎会での生徒代表挨拶

○派遣レポート <以下の名簿順にレポートを掲載します>

	学校名	学年	生徒氏名
1	鳥取東高等学校	1	徳丸 さらさ
2	鳥取八頭高等学校	2	山脇 詠士
3	鳥取城北高等学校	2	蓑原 わか菜
4	湯梨浜学園高等学校	1	井上 葉月
5	倉吉東高等学校	1	末宗 とうこ
6	米子東高等学校	2	高見 真依
7	米子西高等学校	2	堀之内 大都
8	米子松蔭等学校	2	圓山 世津子



ファイロ州立公園にて

令和7年度 鳥取県・バーモント州 青少年交流事業参加レポート

鳥取県立鳥取東高等学校 一年 徳丸さらさ



探求テーマ

【自然環境】

バーモント州における
環境保全活動について

【社会環境】

バーモント州の高等教育における
教育環境について



私は10月10日から21日までの約2週間、鳥取県・バーモント州青少年交流事業に参加し、自然環境と社会環境のそれぞれに探究テーマを設定して現地での活動に取り組んだ。

【自然環境テーマ】

今回私が設定した「バーモント州における環境保全活動について」というテーマについては、十分に深く探究することはできなかった。しかし、環境保全活動を進める上で重要となる、人々の環境に対する意識については多くの学びがあった。

10/14 Shelburne Farms & Mt.Philo State Park

【活動内容】農場見学・州立公園散策

地産地消のおいしさ

大根,人参,トマト,りんご,
牛,豚,鶏,羊,チーズ...



→ **直売所**で販売 鮮度が命!

→ 地元産業の**衰退防止,発展促進,若者へ継承,教育の場**

10月14日に訪れたシェルバーン農場では、地産地消のメリットを改めて実感した。シェルバーン農場では、野菜や果物の栽培、牛・豚・鶏・羊などの飼育、さらにチーズの加工まで幅広く行われており、日本との規模の違いを強く感じた。これらの製品は「一番美味しい状態で食べてほしい」という農場の方々の思いから、直売所で販売されているとのことだった。

また、この農場は教育機関と連携して地元の農業教育にも貢献しており、地元の生徒でこの農場を訪れたことがない人はいないという話を聞き、非常に驚いた。農場での体験を通して、地産地消のメリットは地元産業の衰退防止や発展の推進だけでなく、第一次産業の大切さや技術を若者に継承する役割を果たし、教育の機会を提供する場としても有効であることを学んだ。

自然環境テーマ：環境保全活動について

10/17 Mt.Jericho

【活動内容】ジェリコ山散策

共生の難しさ

観察できたもの

- ・クマの爪痕
- ・マーキングの痕跡
- ・氷河期から残る巨大な岩



自然環境テーマ：環境保全活動について

10/17 Mt.Jericho

【活動内容】ジェリコ山散策

共生の難しさ

共生に必要なこと → **相互理解**

現状：森林破壊による生息地減少、

食料不足 → **人間が原因**



人間が歩み寄る努力をしなければ共生は叶わない

10月14日に訪れたシェルバーン農場では、地産地消のメリットを改めて実感した。シェルバーン農場では、野菜や果物の栽培、牛・豚・鶏・羊などの飼育、そしてチーズなどの加工まで幅広く行われており、日本との規模の違いを強く感じた。これらの製品は「一番美味しい状態で食べてほしい」という思いから直売所で販売されていると聞き、農場のこだわりを感じた。また、この農場は教育機関と連携し、地元の農業教育にも貢献している。地元の生徒には、この農場を訪れたことがない人がいないと聞き、非常に驚いた。農場での体験を通して、地産地消のメリットは地元産業の発展だけでなく、第一次産業の大切さや技術を若者に継承し、教育の機会を提供する場としても有効であると学んだ。

10月17日に訪れたキーピングトラックでは、人の手がほとんど入っていない山を散策し、ガイドのスーさんの解説を聞きながら、動物たちの生きた証や氷河期の名残が見られる地形を観察した。

山に入る前、「クマに襲われないか」と尋ねると、スーさんは「バーモントのクマは優しいから大丈夫」と答えた。その理由を尋ねると、「人とクマがお互いを理解し、寄り添って生きているからだ」と教えてくれた。人がクマを刺激しないため、クマも人を敵視しないのだという。この話を聞き、日本でクマ被害が増加している現状を思い返した。森林破壊によってクマの居場所や食料が失われ、人との衝突が起きているのは、結局のところ人が引き起こした結果である。急速な経済成長を優先する社会では、相互理解に基づく共生を実現することの難しさを改めて実感した。

【社会環境テーマ】

今回設定したテーマは「バーモント州の高等教育における教育環境について」だった。このテーマについては、現地での一日高校体験を通して探究することができた。その中で得た学びのうち、特に印象深かった点を二つ述べる。

社会環境テーマ: 教育環境について

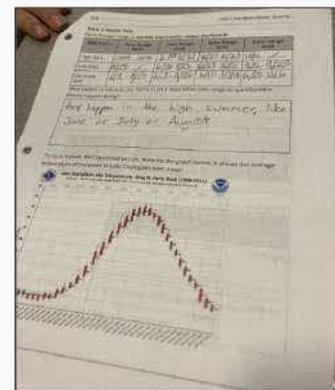
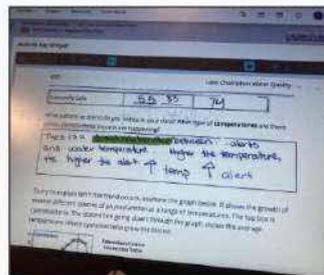
10/16 BHS

【活動内容】一日高校体験

地域とつながる授業

理科の授業の題材

「シャンプレーン湖の
プランクトンの
生息状況について」



→データから考察→実践可能な解決策を考える

一つ目は、地域とつながる授業が展開されていたことだ。私が体験した理科の授業は「地域理科」という名称で、シャンプレーン湖に生息するプランクトンの種類や生息状況、そしてその課題について学ぶ内容だった。日本では教科書に沿って授業が進むため、地域に密着した内容は探究の授業に限られることが多い。しかし現地の学校では、地域に関連する事柄を日常的に授業に取り入れており、地域理解の深化に大きく寄与していると感じた。

10/16 BHS

【活動内容】一日高校体験

学びやすい環境づくり

アドバイザーの時間

→ 過ごしやすい学校づくり

規律ある中での自由な環境

→ 集中力up

→ 学びを促進



二つ目は、学習環境が日本と大きく異なっていたことだ。アメリカの学校を一言で表すなら「規律ある自由」だと感じた。自由はルールやマナーの遵守を前提として成立しており、そのバランスが保たれていた。ある程度自由な環境は、生徒の集中力を高めたり自主的な学びを促したりする効果があることも分かった。一方で、個々が自由に過ごすからこそ、不満や過ごしにくさを感じる生徒が出てくる可能性もある。そのため現地ではアドバイザーの時間がしっかり確保され、生徒が安心して過ごせる学校づくりが徹底されていると感じた。

ホームステイ

環境に優しい町づくり

街中にリサイクルゴミ箱が！

→ ポイ捨て防止&リサイクル

給水器の設置

→ ペットボトル製品を

買わないための工夫



バーリントンの街はいつ歩いても美しく、その理由が気になっていた。ある日、街を歩いていると、ゴミ箱があちこちに設置されていることに気付いた。ゴミ箱は廃棄するものとリサイクルするものの二つに分別されており、エコ意識の高さを目の当たりにした。

ホームステイ

・イベントに全力

→ 庭にオブジェが置いてある家も

→ 仮装もするなら手作りで

・スーパーのレジ

→ ベルトコンベア

→ マイバッグ持参は共通



大きなかぼちゃで溢れる直売所



また、当時はハロウィン前だったこともあり、街全体がその装飾に包まれていた。庭や家の壁にはお化けのオブジェが飾られ、農場の直売所には大きく育ったかぼちゃが並んでいた。イベントを全力で楽しむ姿勢が伝わってきて、私には新鮮だった。

その他にも、スーパーマーケットのレジは日本とは大きく異なっていた。日本では店員が商品を別のカゴに移してくれるが、アメリカでは商品をカートからベルトコンベアに置き、客が精算後に自分でマイバッグに入れる仕組みだ。初めて見たときは驚いたが、買い物カゴが不要なためプラスチック削減につながり、買い物もスムーズに進むという合理的な仕組みだと感じた。しかし同時に、この方法は日本には不向きだと考えた。日本は古くから“おもてなし”の文化を大切にしており、この丁寧な仕組みは今後も維持されるべきだと考える。

【今後に向けて】

現地で得た多くの学びを今後どのように生かすかを考えた。その一つは、この経験を多くの人に伝えることだ。鳥取とは異なる環境で得た学びを共有することで、海外や新しい挑戦への興味を高め、背中を押すことができると考える。まずは鳥取東高で全校生徒に向けて発信する機会があれば、ぜひ伝えたい。また、自然環境についての学びは、将来地域の環境保護団体に所属し、多世代に向けて共有したい。社会環境については、将来中学校の英語教師になった際、生徒が学びやすい授業づくりに今回の体験を生かしたい。海外研修で得た貴重な学びをどのように地域に還元できるか、これからも日常の中で考え続けていきたい。

令和7年度鳥取県・バーモント州青少年交流事業(Tottori-Vermont Youth Exchange) *1 参加レポート

鳥取八頭高校 2学年 山脇詠士

自然環境テーマ「バーモントの生態系」



10月10日から21日の計12日間をアメリカのバーモント州で過ごしました。その研修で学んだことを自然環境、社会環境の2つのテーマから振り返ってみました。また、その他現地で出会った人達、個人的に感じたこと、そして日本との違いについても紹介します。

はじめに、私が「バーモントの生態系」というテーマ設定をした理由ですが、私は小学生の頃から山に登ったり、散策したりするのが好きでよく学校が終わってから山で遊んでいました。その際に見たことのない花や何気なく生えている木に興味を持ち、学校の図書館で調べるということをやっていました。その当時から山の生物について探求するのが好きでバーモント州の山と地元の山とではどのような違いがあるのか気になり、このテーマに設定しました。

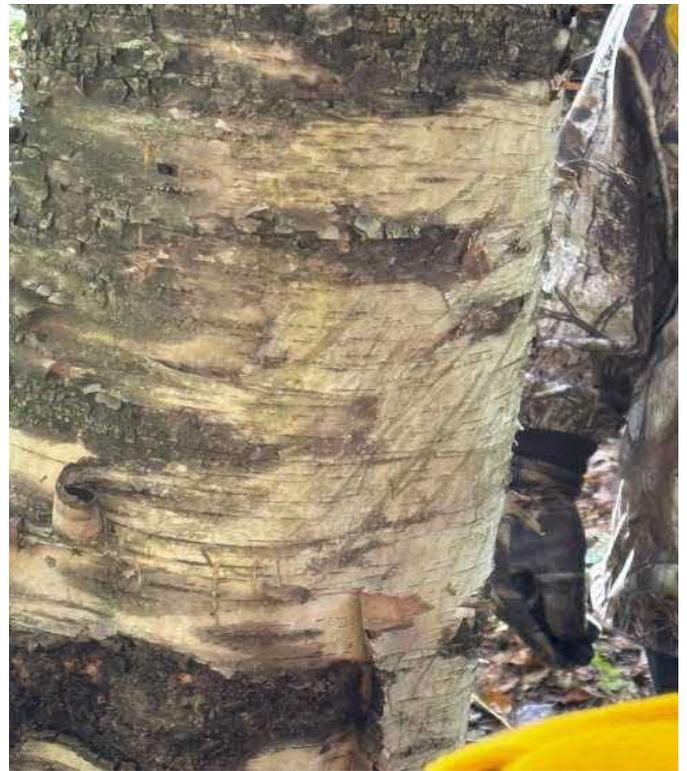
まず私が紹介したいのは、研修内容の一つであるキーピングトラックです。この活動では、山を散策したのですが、私が山について初めに驚いたことは気温です。鳥取と比べ物にならないほど

の寒さで驚きました。私の活動した日の温度は0度～10度でした。この温度が日中の温度だったのでかなり寒かったです。また、活動中はかなり厚着をしていたのですが、体が暖くなるまでの間は寒いので来年行く人には気をつけてほしいです。

散策では、基本的に山の生態系についての話が多かったです。雨が降ったら焚き火ができたらしいのですが、私が行った日は常に晴れており乾燥していたためできませんでした。山では生息する生き物について学びました。特に熊についての調査がよく行われており、熊の求愛行動として木を爪で引っ掻いたあとを見たり、体についた汚れを落とした際やナワバリと証明するために木に抱きつく行動で抜けた毛、熊の日常生活を観察するためのカメラなどが至るところに設置されている様子を観察したりできました。バーモントでは熊に襲われることはないそうです。なぜならば、温厚な熊が多いからです。そのため刺激しない限り襲われることはまずないと現地の方がおっしゃっていました。また、僕達が見たのは人が休むために掘った穴でしたが普通は鹿が休憩のために掘った穴を観察することができるそうです。他にも、植物に観点を置いて調べてみると菌類やキノコ類などの多くが生息していました。また木の根っこが地面から盛り上がっているものもあり非常に興味深かったです。



熊の抜け毛が木についている様子



熊が木を引っ掻いたあとの写真

熊を観察する際に使われている隠しカメラ↓



←山に生えていた菌類やきのこ

木の根っこが地上に盛り上がっている様子



人の休憩で掘られた穴(このくらいのサイズの穴を野生動物が掘る)

社会環境テーマ「地産地消について」

私のホストファミリーの家では、ほぼ毎食のようにりんごが出されていました。ホストファミリーになぜこんなに毎日りんごを食べるのかと聞くと、地域全体でりんごが大量に収穫されるため、よく貰うことがあったり、スーパーでも安売りされているからおやつとしてよく食べていると答えてくれました。どのくらい育てられているのか聞くと、休日にりんご狩りに連れて行ってくれました。そこはりんご狩りをする人で賑わっていました。経営者に話を伺うと、りんごの収穫時期に大きなイベントを開き廃棄するものを減らすようにしているということで、ムダをなくす工夫が施されていました。また、シェルバーン農場を訪れた際に、現地で育てている有名な食べ物であるメープルシロップの原料であるカエデ木を運ぶ作業や、現地で育てている野菜やフルーツ(トマト、人参やりんごなど)、飼育しているヤギやニワトリ、ブタなどを見ました。その際に牧場に買いに来る人はほぼ



いないから地域と連携して売ったり、動物と触れ合いにきた客に売るといった工夫が施されており地域で消費することが徹底されていることを知りました。

←飼育されていた豚の写真



飼育されていたやぎの写真

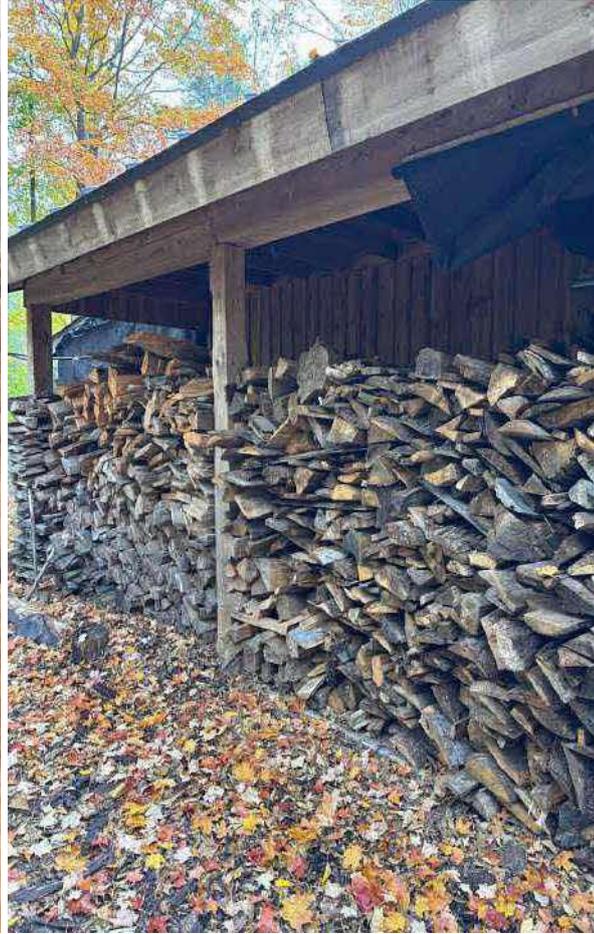
日本では見ない小さいりんご



農場で育ててあったトマトの写真



飼育されていたニワトリの写真



カエデの木を切った写真

この木の樹液でメイプルシロップを作る

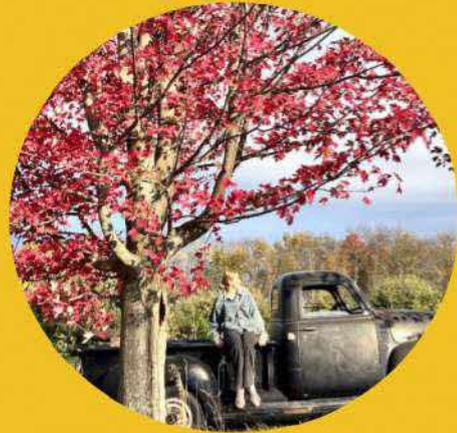
まとめ

私はバーモント研修を通して、英語で緊張せずに話せるようになったり、物事をはっきりと言えるようになったりと、成長することができました。その中でも今回の旅で大きく変化したことは、普段の当たり前前に感謝して生きようになったことです。私はアメリカに行ったことで視野が広がったと実感しています。普段見えていなかったことに現地の人達と過ごしたことで気づくことができました。言葉がうまく通じないことがあったとしても、心を通わせることで気持ちが届くということを体験したことで、アメリカの人たちに自信を持って英語で話したり、伝えたいことをはっきり言ったり、自然と感謝の気持ちを伝えるようになったりしていました。このような経験ができたのは、普段からお世話になっている親や先生方に加え現地で出会ったインストラクターさんや引率のめばえさんやジェイミーさん、一緒に行った仲間、そして私を選んでくださったバーモント研修事業の運営の方のおかげで行けたんだと帰国して改めて思いました。本当に感謝しています。私は今回の事業でたくさんものを吸収することができました。そのため現在祖父の地域で行っている植林で山を豊かにする活動に活かしたり、多くの人に体験を伝えることでSDGsの15番目の目標を達成するために社会貢献していきたいです。

令和7年度
鳥取県パーモント州
青少年交流事業参加レポート

鳥取城北高校 2年 養原わか菜

自然環境:自然と人との関わり
社会環境:米国ダイバーシティの現状



私は以前から自然環境や多文化共生の問題に関心がありました。それぞれの問題がアメリカではどのように捉えられ、対策が施されているのか学び、鳥取県の未来に活かせるヒントを得たいと思いこのプロジェクトに参加しました。

1.自然環境テーマ：自然と人との関わり

生態系と上手に共生していくためには、「対策を考える前にまず、生態系についてきちんと理解することが大事なのでは？」と感じました。本レポートでは、研修を通して深めることができた生態系に関する学びや気づき、そしてそれを踏まえて私たちがどんな行動を取れるのかについて報告します。

1

自然と人との関わり -at Lake Champlane-



水質汚染調査



プランクトン調査



水中で見つかったミジンコ

☆私達が意識できること

- ・ペットの糞の収集を徹底
- ・水質汚染を引き起こさないという意志を1人1人が持つこと

研修三日目にMarcelle Melosira号に乗ってレイク・シャンプレインへ向かい、現地の方々と一緒に水質調査やプランクトン調査を行いました。水質調査は専用の装置を肉眼で見えなくなるまで沈め、透明度を調べることで水質汚染の度合いを測るというものでした。

鳥取県でも水質環境について地下水や水道水の水質管理、池の浄化対策など、さまざまな取り組みが行われていますが、目標としている水質環境には到達していない現状があります。水を汚さないために私たち自身が意識できることもあります。たとえば、ペットの糞には水質を汚染する微生物が含まれている可能性があるため、しっかり回収すること。また、すべての川はどこかで合流し、最終的には海や湖につながっていくので、小さな川であっても「汚さない」という意識を持つことが大切だと学びました。

1

自然と人との関わり -at Keeping Track-



セントマーキングをした熊の爪痕



ギャップ



山からの景色

- ☆動物と共存するために大切なこと
- ・動物にも生息地があることを理解し、謙虚に関わる
- ・1つの自然を守ることで動物を守る

研修最終日にキーピング・トラックで行った野外活動では、動物が自然の中でどのように暮らしているのかを学び、人間と動物が共存していくためのヒントを得ることができました。

動物にとって、匂いは生活の中でとても重要な役割を果たしていました。例として、動物たちが木を引っ掻いて匂いを残し、縄張りを示す「セントマーキング」や、スカンクが自分が尿をした後の土を体につけ、その匂いをメスに嗅がせることで関係を始めることなどがあげられます。

また、写真のように木と木の間に空いたスペースは「ギャップ」と呼ばれ、川の上など木が生えない場所や、木が自然に倒れた所に空間ができることで光が差し込み、新しい生態系を生み出すことができます。

生態系ではすべての生物がつながって生きており、ひとつの動物が絶滅すると、他の生物の生活にも影響が広がります。倒れてしまった木でさえ、自然にとっては大切な資源です。

生態系との共存において大切なことはまず、「動物にも人間と同じように生息地がある」ということを理解し、謙虚に関わる姿勢を持つこと。そして、ひとつの自然(木々など)を守ることが、そこで生きる動物を守ることにもつながるという意識で、自然そのものを大切にしていこうと学びました。

共生を後押しする鍵

人間と生態系の共生を後押しする鍵となるのが、コンポストの取り組みです。バーモント州には有機物をゴミとして出すことを禁止する法律があり、食べそのまま捨てずにコンポスト(堆肥化)することで温室効果ガスの削減を図っています。

1

自然との関わりについて —コンポスト—

目的: 有機物の埋め立てをしないことで温室効果ガスを削減する



レストラン



学校のカフェテリア



家庭内のコンポストボックス

レストランや学校のカフェテリア、そして各家庭にもコンポストボックスがありました。食べ残しや果物の皮は他のゴミと分けてこのボックスに捨てます。コンポストは、本当に手軽で、特別な知識がなくても家庭ですぐに始められます。これは鳥取県に住む私たちにも簡単に取り入れられる取り組みだと感じたので、積極的に取り入れ、鳥取の未来につなげていきたいと思いました。

その他

1

自然と人との関わり -Others-



フィロ州立公園の電気自動車充電スペース



採集した年輪



ペットの糞専用ゴミ箱

コンポスト以外にも生態系へのさまざまな配慮が見られました。左の写真はフィロ州立公園に設置された電気自動車の充電スペースです。アメリカでは電気自動車の利用が広がっており、実際に私のホストファミリーも日本製の電気自動車を使用していました。

また中央の写真は、研修初日に伺ったセントマイケルズ大学の学生と行った調査です。この研究は昔焼失した地域の木の年輪を採取し、森林の変容を証明するというものでした。

右の写真もフィロ州立公園で撮影したものです。山道にペットの糞のゴミ箱が設置されていました。

このように州で定められていなくても、大学や施設のような場所で積極的に自然環境に関する取り組みを行っていました。

2.社会環境テーマ:米国ダイバーシティの現状

2 米国ダイバーシティの現状

- 1.誰もが住みやすい社会を作るためのヒント
- 2.町中で見られる多文化共生社会の特徴
- 3.アメリカと比較して見つけた日本の課題

鳥取県では現在、人権尊重の社会づくりが条例化され、ダイバーシティに関する取り組みが進められています。

私は以前から多文化共生に強い関心を持ち、移民が多くダイバーシティの先進国ともいえるアメリカで、日本に足りないことはなんなのか肌で感じたいと考えていました。そこで事前に質問内容をまとめ、ホストファミリーにバーモント州における多文化共生社会の現状についてインタビューを行いました。

今回アメリカで生活をしてみて、多文化共生社会における日本との大きな違いを新たに発見することができました。これらの観点を踏まえ、アメリカにおけるダイバーシティの現状と、滞在を通して自分が気づいた点について報告します。

1.誰もが住みやすい社会を作るためのヒント

バーモント州はジェンダーや異文化に対する理解が社会全体で重視されている地域で、どんな性別や人種であっても批判的は人はほとんどおらず、すぐに受け入れられる環境だそうです。

育児や家事に関しては夫婦でお互いが必ず休む時間を取りながら交代で行うことで、負担が片方にかからないように意識しているそうです。(一個人の考えです。)



↑ホストマザーが仕事に出ている間に家事をするホストファザー

2.日常で見られる多文化共生社会の特徴

現地で伺った学校にはLGBTQを象徴する旗や、黒人差別への反対を象徴する旗が掲げられていました。これらの旗は学校だけでなく、町中やお店、家の中でも多く見られました。下の写真は実際に現地の学校に行った際に撮影した写真です。



これだけではなく、バーモント州の学校では多文化共生に関する様々な取り組みが行われています。例えばBSD(バーモント学区)では、共通のアイデンティティを持つ学生が集まって話す「Affinity Spaces(=共感・支援の場)」を設けていて、高校レベルでも運営しています。

3.アメリカと比較して見つけた日本の課題

生活を通して、アメリカにおけるダイバーシティは非常に先進的であることを改めて実感しました。滞在を通じて気づいた日本に足りない点は、政府や自治体の政策よりも、むしろ多様性をどう捉えるかという1人1人の向き合い方の部分でした。

バーモント州では、州全体で多様な人種への理解を深めようと努め、誰にとっても住み心地の良い社会が築かれていました。鳥取県でもまずは、1人1人がこうしたテーマへの理解を深めるための取り組みが必要だと感じました。

3.テーマのまとめ、提案

3 テーマのまとめ、提案

アメリカとの大きな違い「1人1人が問題と向き合う姿勢」

鳥取県の現状:自然保護、男女共同参画などの面でとても先進的！！

個人の意識を高め理解を深めるために

- ・SNSを通じて自治体の取り組みや県民が参加できる催しを紹介
- ・海岸清掃などのボランティア活動が内申点につながる仕組みを整備
→学生の参加を促す
- ・ジェンダー問題や人種差別に関するセミナーを学校や企業で開催
→誰にとっても安心して過ごせる環境づくりに繋がる

鳥取県では現在、自然保護や男女共同参画の取り組みが進んでおり、日本国内でもかなり先進的な県です。ですが、先ほどもあげた通りアメリカでの生活で感じた日本との大きな違いは自治体の動きよりもむしろ「1人1人が問題と向き合う姿勢」でした。このことを踏まえて、自治体の取り組みを生かして個人の意識を高め、理解を深めるためにどのようなことをすれば良いのか提案します。

1つ目はSNSを通じて自治体が行っている取り組みを発信することです。

これを行うことでより幅広い世代に情報を届けることが期待できます。

2つ目はボランティア活動が内申点につながる仕組みを整備することです。

これを行うことで学生の参加を促すことができます。若い頃から知識を身につけたり、問題解決の方法を知ること、これから先の未来に繋げることができます。

3つ目はジェンダー問題や人種差別に関するセミナーを学校や企業で行うことです。

これを行うことで身近な人の理解が深まり、偏見が減ることで、自分が所属する団体の中でも安心して過ごせる環境づくりにつながります。

4.アメリカでの学校生活

今回協力していただいたバーリントン高校は新校舎建設中のため、現在は閉店したデパートを学校に改造して使用していました。そのため校内にエスカレーターがありとても新鮮でした。



⇧校内のエスカレーター

⇧生物の授業

授業は大学のように選択制で、生徒が自由に出入りしたりお菓子を食べながら受ける姿もあり、日本の高校との違いを実感しました。こうした自由な雰囲気の中で、自分の学びたいことを主体的に選ぶ姿勢が育まれているのだと思いました。

★アメリカは16歳から運転できる

16歳以上の多くの学生はライセンスを取得しているそうです。私も実際に、同い年のホストブラザーの運転で学校に向かったり、学校帰りにはホストシスターの友達が運転する車でショッピングモールに遊びに行ったりしました。

5.アメリカでの休日



計4日間の休日にはホストファミリーに多くの場所に案内していただき、さまざまなことを体験することができました。私達がアメリカに行ったときはとても天気がよく、アメリカは日本よりも広大な面積を持っていることもあり景色が開けてとても綺麗でした。また、ハロウィンにはとても力を入れており、ほとんどの家がハロウィンの飾り付けやライトアップをしていました。

6.まとめ



今回のプログラムを通して自分の探求したいテーマについて多くの学びを得ることができ、鳥取県をより良くしていけるためのヒントも得られました。自分自身については、積極性や異文化理解の力が特に身についたと感じています。私は10日間の滞在で翻訳をなるべく使わず、自分の力でコミュニケーションを取ること、気になったことやお願いしたいことがあれば積極的に伝えることを意識しました。また、研修を通して普段の生活では関わる機会のないアメリカの同年代の学生と交流できたことで、日本の学生とは異なる価値観や学びに対する姿勢を知り、新たな発見につながりました。

今回一緒にプログラムに参加することができた鳥取の学生のみんな、そして引率者の福田さん、ジェイミーさんと貴重な体験を共有できたことは、私にとってとてもいい経験になりました。

今回得た学びと気づきを大切に、これからの歩みに確実に生かしていきたいと思えます。

このプログラムに協力していただいた皆さん本当にありがとうございました。

令和7年度 鳥取県・バーモント州青少年交流事業参加レポート

湯梨浜学園高等学校 1年 井上葉月

テーマ（自然環境）「バーモント州の生物・環境保全の取り組みと人々の環境意識」

テーマ（社会環境）「バーモント州の自然の観光・その他の産業への活用」

1. はじめに

私は環境学習や異文化交流を通して様々なことを学び、自分の視野を広げたいと思い、この事業に参加した。この事業に応募するにあたり、事前にバーモント州について調べ、バーモント州は鳥取県と似たような環境で、また観光業が盛んだということを知り、学校での課題研究に関連付け上記のようなテーマを設定した。このレポートではそれぞれのテーマに沿って、現地での活動内容や体験したこと、学んだことについて書く。

・バーモント州について

アメリカ合衆国北東部に位置し、人口はアメリカで2番目に少ない。

2. 自然環境テーマ「バーモント州の自然を守る取り組みと人々の環境意識」

シャンプレーン湖調査では船に乗って水質調査とプランクトンの観察をした。水質調査は特定の試薬などを使うのではなく、メジャーがついた白黒の円盤を湖に沈めて円盤が識別できなくなる深さを測るという方法で水の透明度を測った。こ



この透明度は水中の生物の多様性を評価する一つの指標となる。透明度は、水中のプランクトンの量が多いと低くなり、透明度が低いと水中に日光が十分に届かなくなるため、水生植物の光合成が妨げられ、生態系の劣化につながる。

また、湖の調査員の方の話によるとシャンプレーン湖の環境には陸地の環境も関わっていて農薬やマイクロプラスチック、外来生物による汚染があるそうだ。洗濯回数を減らすことはマイクロプラスチックの排出の軽減につながると説明され、身の回りの環境や普段の生活で環境に配慮する意識を持つことは大切だと改めて感じた。

キーピングトラックではジェリコ山の森の中を歩き、森林の変化や野生動物に対し理解を深めた。ガイドのスーさんは長年ジェリコ山の野生動物の研究をされていて、私たちに野生動物の痕跡を見せてくださった。写真は木についた熊の爪痕と毛で、縄張りを主張するセントマーキングの痕跡である。



また、森の中で古くなった木が倒れ太陽の光が差し込みギャップが形成された所を見ることが出来た。ギャップが形成された場所には新しい木が育つが、中には写真のように古い木が倒れて残った幹の上に新しい木が育つこともあると知り驚いた。



フィロ州立公園 (Mt. Philo State Park) ではペットの糞を捨てるための袋とゴミ箱が設置されているのを見かけ、日本では見たことがなかったので珍しく感じた。今までペットの糞について深く考えたことはなく、この時初めてペットの糞が伝染病や汚染などで生態系に影響を及ぼす可能性があることを知った。

また、人々の環境意識について、自然環境の調査をしている人だけでなく、街の人々も自然を大切にするという意識が高いように感じた。私が滞在中にサイクリングロードや家の近所を散

歩したとき、道にゴミが落ちていなかったのが印象的だった。至る所にゴミ箱が設置されていることが理由の一つかもしれないが、バーモント州最大都市のバーリントン市でさえ居住区と自然との距離が近く、人々は自然の中でサイクリングなどのアクティビティをすることが日常となっていることも自然を大切にする意識を持つことにつながっているのではないかと思った。

3. 社会環境テーマ「バーモント州の自然の観光活用」

バーモント州では自然の中でハイキングやサイクリング、釣りなど様々なアクティビティを楽しむことが出来る。ホストマザーによると紅葉がきれいな秋は一年を通して一番多く観光客が訪れるそうだ。

フィロ州立公園ではペットと一緒に歩いている人を見かけた。ハイキングコースは歩きやすく、また人工物で整備されているのではなく自然をそのままの状態で楽しめる場所だった。頂上からはシャンプレーン湖やバーモントの広大な土地を眺めることが出来た。自然の観光活用とは少し異なる



が、プログラムで訪れたシェルバーン農場は、もともと普通の農場だったが現在は若者のための農業や環境教育の場として活用されていた。

また、バーモント州には廃線となった鉄道跡を利用したサイクリングロードがいくつかあることをホストマザーが教えてくれた。このような場所では、観光客だけでなく地元の人々も日常的にサイクリングを楽しむのだそうだ。ホストファミリーと一緒に歩いた Causeway は湖を横断する区間でとても景色がきれいだった。

このように元々あった建物や環境を観光地に利用していることを知り、鳥取県でも似たようなことが出来たらいいなと思った。また、私がバーモント州で様々な場所の自然に触れ、印象的

だったことは自然がきれいに整備されていて荒れていなかったことだ。町の景観が美しく保たれていることも観光地の重要な要素の一つだと感じた。

4. おわりに

この事業に参加したことで環境学習や異文化に触れる経験をすることができ、新たなことを学び、考えるきっかけとなった。今

回、私がこの事業に参加して体験したことや考えたことなどを学校の課題研究に活かしたり、できるだけ多くの人と共有していきたい。



○題 名:「令和7年度 鳥取県・バーモント州青少年交流事業参加レポート」

・学校名:鳥取県立倉吉東高等学校 学年:1年 氏名:末宗とうこ

・テーマ(自然環境)「動物保護と人間社会をどのように共存させているのか」

・テーマ(社会環境)「NGO や NPO が環境保護にどのように関わり、学校教育でどう扱われているのか」

結構似ているな——。これが、私の最初の感想だった。季節は日本より少し早いものの、日本の秋とどこか通じる景色。朝に起きる時間も変わらず、学校が始まるのは九時ごろ。十日ほどたち、英語で自分の思いを伝えられるようになってくると、目も、そして耳も、次第に肥えていった。私は毎日のように新しいものに出会っていたのだ。

そもそも、研修に参加する前から知りたいと思っていたことが二つあった。ひとつは、動物保護と人間社会をどのように共存させているのか。もうひとつは、NGO や NPO が環境保護にどのように関わり、学校教育でどう扱われているのかという点だった。

そうした問いを胸に抱えながら過ごしていると、まず私の目に飛び込んできたのは、日常の中に当たり前のように存在する野生動物の姿だった。



バーモントには、ふつうにリスがいる。それなりの大きさの動物が木をのぼっていても、誰も見向きもしない。「なんと！こんなにも愛らしい生きものに目を向けないなんて！」と思わず叫びたくなるほどだ。バーモントでリスがそこら歩いているのはごく当たり前の光景。しかし日本で私がリスに会おうとすれば、まず両親に動物園へ行きたいと頼み込み、五百円ほどのチケットを買い、ようやく狭い檻の中でせわしく動く茶色い毛玉を見ることになる。

私にとってリスは「希少な存在」であり、同時に「見えにくい存在」だった。森に住んでいるはずなのに、めったに姿を見せない。そんな“見えない”相手を守ろうという発想は、そもそも生まれにくいのかもかもしれない。



そんな私たちは、Keeping Track のフィールド調査に参加した。動物の足跡や痕跡をたどり、そこに生きるものたちの活動を知らうとする取り組みだ。そこで私が人生で初めて見たのは、くまの爪痕だった。木の幹に四本の平行な線が走り、時間を経た傷は黒く深く刻まれていた。その存在感は、くまの力強さを静かに物語っていた。これは「セントマーキング」と呼ばれ、縄張りの主張やさまざまなコミュニケーションに用いられるのだという。木も、石も、草も。彼らの暮らしの舞台すべてが、その役目を担っている。

その瞬間、木の伐採、生物の減少、気候変動といった問題が一本につながったように感じた。なぜ動物を守るには環境を守らねばならないのか。それを私は、森の中で初めてしみじみと実感した。

この体験を与えてくれたのは、NPO の Keeping Track である。ただ「自然を守ろう」と声を上げるのではなく、足跡や痕跡丁寧に読み解くという地道で確かな方法によって、生きものの姿を“見えるもの”へと変えてくれる存在だ。

人は、見えないものを守れない。



を

けれど、見えるようになった瞬間、その一つひとつに意味が宿り、声なき声が届きはじめる。Keeping Track の研修は、まさにその「見えるようになる瞬間」を私たちに与えてくれた。

彼らは地域の人々と手を取り合い、生息地の変化や動物の動きを記録し、その先の保全につなげている。大きな組織ではないからこそ、地域に深く寄り添い、森とともに生きる人々の思いをすくい上げているのだ。私がくまの爪痕を見つめたときに胸の奥で震えたあの感覚。それを誰かの中で静かに育てていくような存在でもある。

さて、日本の自然保護に目を向ければ、日本野鳥の会など市民参加型の活動は多いものの、中心はどうしても鳥類観察に偏りやすい。哺乳類の足跡や糞、爪痕といった“見えにくい痕跡”を読み取り、生息状況を立体的に把握する仕組みは、まだ発展途上にある。また、市民が集めた観察情報が行政の保全政策へ反映されるしくみも十分とは言えず、“森の声”が政策に届きにくいという課題も残る。

さらに、活動が種ごとに分かれがちで、森を一つの暮らしの場として捉える視点が不足している。複数の生きものを横断する、生態系全体を見通す眼差しが求められる。そして教育分野でも、学校と地域の観察活動が出会う機会は多くない。野生動物の足跡や痕跡を辿る経験が子どもたちに広がれば、未来の保全を支える確かな学びとなるだろう。

総じて、日本の自然保護には「観察技術の幅」「行政との橋渡し」「生態系全体を見通す視点」「教育の基盤」という四つの柱が十分ではない。この柱がそろったとき、日本の自然保全は、長い取り組みへと成長するはずだ。

私の将来の夢は、動物行動学者になること。今回の活動であった、セントマーキングを探す小さな冒険を生涯を通してしたいのだ。「手を取り合って」。私たちは物理的に動物と手を取り合うことはできない。けれど、セントマーキングは、彼らの存在が確かに「ここにいる」と教えてくれる。私は、バーモントの動物たちと、見えない手をそとつないだ。



さあ、みんなで日本の森へ行こう。
彼らの声を、聞くために。

令和7年度鳥取県・バーモント州
青少年交流事業参加レポート
米子東高校 2年 高見真依

○自然環境 自然環境保護への実践的な取組

環境教育

○社会環境 アメリカにおける少数民族文化の

保存



○自然環境

バーモントは自然豊かな街である。自然保護のために多くの取り組みを行い、豊かな自然環境を保持している。この研修では自然を見つめるだけでなく、それを今日まで生かす取り組みについて学んだ。その中で、私たちが実際に見たり聞いたりして体験したことをまとめる。

• Keeping Track

私たちはこのプログラムに参加して山の中を歩いた。木の葉や土の上を歩き、道中には倒木を何度も見た。それらの倒木は人や動物によって倒されたものではなく風化によるものだとわかった。また倒木の上には新たな木の芽がはえており、生物が土に還

ったあと新たな生物が誕生するという生態系循環を体感した。

Keeping Track で私たちを先導し様々なことを教えてくれた Sue は野生動物との共生について語った。その内容をまとめる。

「バーモントの地域では野生動物による人的被害が比較的少ないとされている。背景には、住民が自然環境との適切な距離を保ちながら生活し、生態系を乱さないよう配慮してきたことがあると考えている。人と動物が互いの領域を尊重することで、無用なトラブルを避け、落ち着いた共存関係が保たれていると思う。」

この言葉から、バーモントの人々は環境を尊重した行動をとり、野生動物の生態を理解した上で土地の利用や生活の仕方を工夫していることがわかった。環境への配慮が、結果として人間の生活の安全にもつながるということは日本での環境活動にも通じるところがあると思う。

Keeping Track についてさらに詳しく調べると、次のことがわかった。

- 実際にフィールド調査やモニタリングを行う「行動型」の自然保護活動
- 専門家だけでなく地域住民が主体となって野生動物の生息地をまもっている
- 青少年プログラムを行い環境教育もさかん

Keeping Track は市民が参加する取り組みとして地域の主体性と次世代の環境意識を育てることで、長期的に持続可能な自然保護を実現する効果があると思う。

さらに、この活動は地域住民自身が「自分たちの暮らしと自然環境が密接に結びついている」ことを実感する機会にもなっている。市民が生態系の変化を自ら観察することで、専門家だけでなく、地域全体で自然を守るという意識の土台がつくられる。また、子どもなど若い世代がフィールド調査やワークショップを通して学ぶことで、今後の地域環境を支える人材が継続的に育成されていく点も重要である。このように Keeping Track は、環境保護と地域コミュニティの活性化を同時に実現する取り組みとして高い有効性と可能性を持っていると言える。

・ シェルバーン農場

私はさらに自然環境をもとにした他の分野の取り組みについても調べた。

豊かな自然を観光や教育などに活かす事業として二日目の研修で訪れたシェルバー

ン農場の取り組みがあげられる。この農場には羊やブタなどの動物がいたり、リンゴやにんじん、トマトなどを育てる畑やビニールハウス、メイプルシロップを作る小屋など様々な場所があったりした。私たちはりんごを木からとったりトマトをたくさんとったりしてそのまま食べた。メイプルシロップの試食もしてバーモントの特産品を楽しむことができた。

農場の方の話聞いた。私はその話を通して、この農場が「環境への配慮」と、「地域社会との密接な関わり」という面でサステナブルな活動をしていると感じた。

そこでは、環境負荷を減らすことを最優先にした農業が行われているようだ。農薬や殺虫剤の使用をできるだけ控え、自然の力で自然の生態系を守りながら作物を育てる「一体型農業」を実践している点が特徴的で、生態系とつながった循環型の農業が行われている。さらに収穫した食材は地域のレストランに直接届けられ、地産地消を通して持続可能な食の循環づくりにも貢献していることがわかった。

また、この農場は教育にも力を入れており、親子向けの体験ツアーやこども向けプログラムを実施して、食、自然界、食料システムをテーマに実践的なカリキュラムを取り入れているようだ。実際に動物、土、農作物に触れる活動を通して、過度な商業化に頼らない農業のあり方や環境保全の大切さを伝えている。こうした取り組みは、日本の農業と比較してもサステナビリティへの意識が特に高く、地域全体で環境を守る姿勢が印象に残った。



←シェルバーン農場

研修を通して、バーモント州は

- ・「市民が主体」となる自然保護の仕組み
- ・地域の自然を教材にした体験型の環境教育

の取り組みが盛んに行われていると知ることができた。現地の人々がどのような考え方で環境保全に向き合っているのか知ることが、私たちの将来の地域づくりにヒントを与えらると思う。鳥取県も、地域全体で自然を見守る文化というものをさらに育てていくことで、持続可能な環境活動が行われていくのではないかと考える。

○社会環境

今回の研修では、現地の人々と生活を共にする中で、文化が違うとはどういうことか、そして民族文化がどのように保存されているのかについて多くの学びがあった。特に、ホームステイで見た文化的行動や地域の活動は、文化継承の姿を身近に感じさせるものだった。今回は私が経験した文化に関連する様々な活動と、その経験から得た気づきをまとめる。

私のホストファミリーはチベット出身である。ホストシスターは英語とチベット語を、ほかの家族はチベット語を話し、中国語がわかる人もいた。家ではいつもチベット語

で会話をするらしく、私には英語で話してくれたりホストシスターが通訳をしてくれたりした。

私はホームステイを通してチベットの文化に多く触れた。ある日家に帰ると、家に数人の僧侶が来ていた。ホストファミリーの家の一室にはチベット仏教のお祈りをする部屋があった。小さな仏像がたくさん置いてあったり仏像や模様をついた布が壁にかけられていたりしていた。僧侶たちはホストファミリーの家に泊まり、その部屋を使ってお祈りをするそうだ。僧侶とも少し話をした。会話を通して少しのチベット語を教えてもらい、日本語とチベット語は1から5までの数の数え方が非常に似ていることを知った。

私がホストファミリーとともに体験したことは、・チベットの料理　・チベットフェスティバル　・サンデースクール　などだった。

・チベットの伝統料理

ホストファミリーは私にチベットの料理を振る舞ってくれた。チベット語で「モモ」と呼ばれる蒸した餃子は、日本のものよりも少し大きかった。味は日本のものと似ているがモモのほうが肉がたっぷり入っていたと感じた。また私はバター茶も飲んだ。これは紅茶に牛乳、バターなどを加えて作られる。調べてみると、バター茶には乾燥した気候で失われがちな水分、脂肪分、熱量、塩分を一度に取ることができる効果があり、チベットの気候に合わせて生まれたものであることがわかった。塩味が強く、体の芯からあったまるような感じがした。



↑モモ（餃子）

↑バター茶

・チベットフェスティバル

私は休日、街の教会で行われたチベットの人々の集会に参加した。そこでは子供からお年寄りまでたくさんのチベットの人が来ていた。数人の僧が入場し歌を歌ったりお経を唱えたりしていた。集まった人々がそれぞれ家から料理を持ち寄って皆でシェアしていた。またたくさんの人がチベットの踊りを踊ったり伝統の歌を歌ったりしていた。チベットの伝統衣装を着ている人もたくさんおり、私もホストシスターに衣装を借りて着ていった。



↑みんなで踊っている様子



↑チベットの伝統衣装

・サンデースクール

ホストシスターは毎週日曜日の午前中、バーモントに住んでいるチベットの子どもたちにダンスを教えている。ホストシスターは子どもたちに教えるのが得意で、優雅に踊っていた。このダンスのレッスンは毎年開かれるチベットフェスティバルのためである。上記のものとは別のもので1年に1度、バーリントンのコミュニティーセンターで開かれる大きなイベントだそう。



← 1年に一度開かれるチベットフェスティバルの写真

答えである。

私はホストシスターに「チベットの文化を継承し大切にすることは重要か」という質問をした。以下はその

「もちろん重要だ。チベットは今地図上にはなく、多くのチベット人がアメリカ、インドなどに移住している。私達や彼らはチベット語を学び話し、歌を歌い、踊りを踊る。そうして文化を保存していくことで、私達は自分たちの文化がまだ存在していることを示している。」

チベットの人たちは故郷を離れても言語や伝統文化を通して自分たちの文化を守り続けている。上記の様々な取り組みも、文化を守るひとつの役割をもっており、彼らは自分たちの文化に誇りを持っていることが分かる。

チベットの人たちの姿勢は、鳥取県における伝統継承にも通じると考える。人口減少などの課題があっても、人々が受け継いでいくことによって伝統が未来へつながっていく。この考え方は、鳥取県の地域文化を守り持続可能な伝統継承の実現に向けて取り組んでいくうえで重要な視点となりうると考える。

最後になりましたが、本レポートの作成にあたりホームステイの受け入れ等研修を支援てくださったホストファミリーの皆さま、研修先の皆さま、そして鳥取県、バーモント州の関係者のすべての方々に深く感謝いたします。

<https://keepingtrack.org/> Home Page | Keeping Track

<https://shelburnefarms.org/educators/school-programs>

<https://teatotal.jp/butter-tea/>バター紅茶はモンゴルやチベットの伝統茶！効

果・効能や作り方をご紹介

「令和7年度鳥取県・バーモント州青少年交流事業参加レポート」

米子西高校2年 堀之内大都

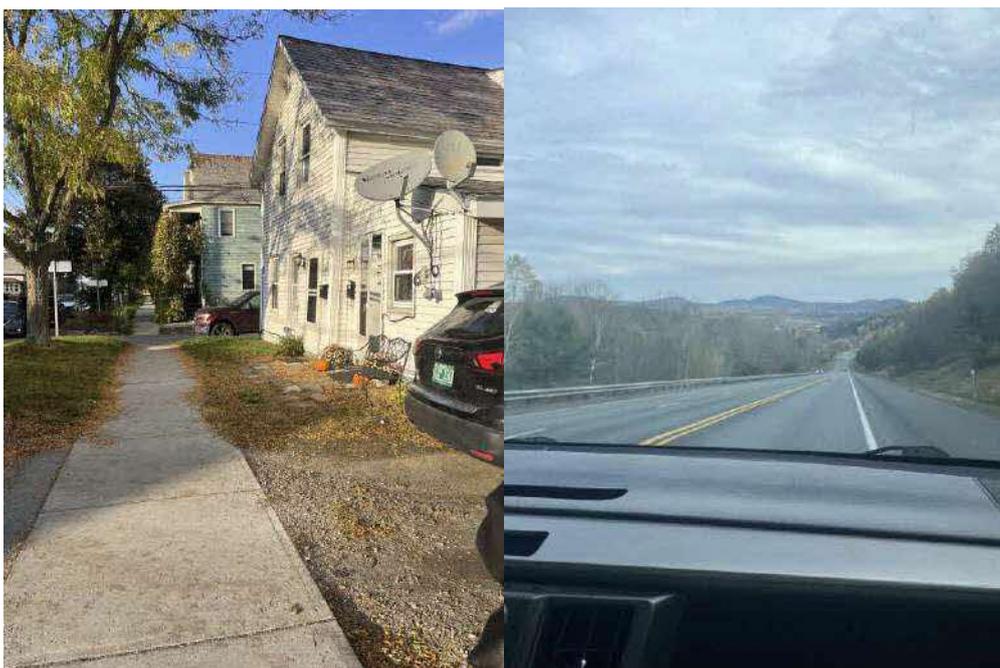
私は10月10日から11日間、鳥取県・バーモント州青少年交流事業に参加しました。今回は設定したテーマに対してバーモントでの経験をもとに振り返り考察を行います。

・自然環境テーマ「自然環境の保護と再生可能エネルギーによる発電の両立」

最初に自然環境についてです。

バーモントの面積に対する森林の割合は70～80%程と鳥取とほとんど同じであり、人口も鳥取と変わらない。しかしバーモントには再生可能エネルギーでの発電を100%達成している都市があると知りました。それなら環境が似ている鳥取でも同じことができるのではないかと考えたことがこのテーマを選んだ理由です。彼らがどのような配慮をして自然と共生しているのか、また自然環境保護の先進都市として知られる理由についても考えながら今回は自然環境保護の視察を行いました。

最初の調査はソーラーパネルを探してみることでした。しかし私達がホームステイをした町、バーリントンではそれがついた屋根を見つけることはできませんでした。調べてみるとバーモントでは太陽光発電は高速道路沿いで多く行われているそうです。実際に高速道路であたりを見渡してみるも、またソーラーパネルを見つけることはできませんでした。



左、アメリカの一般的な家

右、アメリカの高速道路

調べてわかったことはもう一つあります。それはバーモントでは廃棄物発電やバイオマス発電も盛んに行われているということです。このことからゴミや食べ残しを活用しているという仮説を立て、町全体ではなく一家庭に焦点を向けて調査をしました。もともとアメリカの家庭ではコンポストをするのが一般的だと聞いていましたが、私がホームステイをした家庭にはコンポストの機械はなくプラスチックか生ゴミ化だけを分別していました。しかし食べ残しは日本より多いように感じました。

①そこで私は仮説に対して、大量に捨てたものをエネルギーとして活用することで、人々の生活を賄えるくらいの発電が行えていると考察しました。食べ物で言うのなら、日本ではそもそも食べ残しをしないのがマナーとされています。そのため余ったものに対する対策が十分に浸透・発展しておらず結果的に、捨てられるものは捨てられその後活用されることはないのかもしれないと考えました。反対にアメリカでは、日本よりも大量生産・大量消費の上に経済が成り立っていると言えます。そのため消費しきれなかった場合の対処法として、余ったものを発電などのエネルギー生産に使うといった方法をとった背景があるのかもしれませんが。

②また反対に電気を使わないという配慮も見られました。僕のホームステイ先の家では夜になるとリビングはキャンドルで照らされ基本電気はつきません。また水が貴重ということから洗濯を毎日行うということありません。そのため水とともに電気を節約していることになり、このような節約が他にもみられました。

①、②のような態度から、電力の自給率やそれを占める再生可能エネルギーの割合が高く、バーモントは自然環境保護先進都市であると言われていたのだとわかりました。この調査を通して今鳥取に必要なことは、各家庭が資源を使いきれなかったときにその資源を次のエネルギーとして使うことなのだとわかりました。

話が少しそれますが、私達は視察の中でシャンプレイン湖環境調査を行う機会がありました。そこでは船に乗り、湖の水を採取して水質を調べるという実験をして、自然環境保護についての話を聞きました。特に印象に残っている話は、洗濯によって衣服からマイクロプラスチックが発生し、その洗濯した水を流すことで海や湖にマイクロプラスチックが増えていしまうというものでした。洗濯の回数を減すことは水や電力の消費、マイクロプラスチックの数を減らすことにつながるの、数日に一回の洗濯は環境に優しい行為なのだとより一層感じました。その日家に帰ってからホストブラザーにこのことを話すと彼も学校の行事でこの船に乗ったことがあると話してくれて、学生のうちからみんなで環境について学ぶことも、環境に対する関心を高めることにつながっているのだらうなと思いました。

・社会環境テーマ「言語や文化の共生の仕方について」

このテーマを選んだ理由は、これから鳥取の多様性を受け入れる必要性が増えてくるとおもうからでした。どうやってその人たちとコミュニケーションを取っていけばよいのかを考えると、違う文化を持つ人達をどう受け入れればいいのか実感がわかずいつも「わからない」という答えしか出て来ませんでした。そのため多様性に対する寛容さはどこで育まれているのか知りたいという目的のもと調査を行いました。

私たちが視察に行ったバーモントの2つの大学とホストブラザーが通う **Burlington high school** ではいろいろな意味での多様性、寛容さを目の当たりにしました。

例えば大学の自習室です。日本では自習室といえば静かに勉強をする場所であり、どこか硬い雰囲気を持っているように思います。勉強に集中するための場所ですからそれは正しい姿と言えますし、それが好きだという人もいます。事実私もその雰囲気が好きです。しかし私達が視察に行った大学の自習室には、机と椅子はもちろん、ソファがありビーズクッションがあり壁にはたくさんの写真が貼ってありました。それらの配置はまちまちです。日本の自習室を「規則正しい」という言葉で表すなら、その大学の自習室は「リラックス」という言葉で表現したいと感じました。「リラックス」とは言っても、そこにいた大学生は友達とお喋りをするのではなく自分の作業に集中していました。雰囲気は柔らかくても目的を見失ってはいませんでした。日本ではあまり見ない、硬い自習という行為を柔らかい雰囲気の中に置くことはストレスを軽減し、ひいてはその硬いという偏見すら打ち砕く多様性の1つだったのだと感じました。

また **Burlington high school** ではホストブラザーの友達と何度か握手を交わしました。その中には白人、黒人、アジア人がおり、また彼らの中には日本語を勉強しているという人が少なからずいました。授業で教わっているのではなく自ら学んでいたのです。私がこれまで日本語以外の言語に触れたのは、学校の英語の授業だけでそれ以外に自分で知ろうとすることはしていませんでした。彼らの母国語ではない言語、異なる文化を学ぼうとする姿勢を見ることができたのだと感じました。

この視察では、偏見があると気づいたのなら学ぶチャンスであるとわかりました。偏見は染み付いてしまっていて簡単に変えられるものではないけど、自習室の例にあったように1つアレンジを加えることによって多様性を受け入れるきっかけを作ることができるのだと学ぶことができました。



バーモント州立大学の自習室

・「バーモントでの生活について」

最後は、この旅での驚いたことや思い出について書きます。まずバーモントの生活で感じたのはやはり物価の違いでした。バーモントについた翌日の朝、私はホストファミリーとベーグルを食べに行きました。ベーグル3つとドリンク2つ小さいチョコケーキを会計したときの値段は46ドル（約7000円）で目玉が飛び出る思いをしたのを覚えています。持ってきたお金は足りるのだろうかと不安さえ感じました。また入浴の際にはカルチャーショックを感じました。事前の説明会で説明を受けていたことではあったのですが、アメリカでは基本浴槽にお湯は張らずシャワーのみで時間もあまりかけられません。それはトイレとバスルームが一緒になっているからでもあり、水を無駄遣いできないからというのもありました。ある日、高速道路を走ったときメーターを見ると時速140キロを超えていて、アメリカではそれが一般的なのかと思っ手回りの車を見ると、私達の車だけが他の車をビュンビュン追い抜いていました。ホストブラザーはそれが普通だと言っていました。



左、初日のベーグル

右、ホストブラザー・ホストマザー

何より感じざるおえなかったのは同じ時間をともに共有できたことへの感謝と、それが終わってしまうことへの悲しさでした。ホストファミリーやバーモントの人たちはもちろん、一緒にバーモントに来た友達や引率の方と別れるのも悲しかったです。いつも出会えることの貴重さを身を持って実感しました。そんな体験や視察での学びを得ることができた今回のバーモントへの旅は私の価値観を大きく変えるものでした。

終わりに、今回これらの貴重な体験をさせていただきました鳥取県並びに引率の方々、ホストファミリー、**Green Across The World**の皆様、事業をともにしたすべての関係者の皆様に深く御礼申し上げます。ありがとうございました。

令和7年度 鳥取県・バーモント州青少年交流事業参加レポート

米子松蔭高等学校 2年 圓山世津子

<テーマ>

自然環境：個人ができる環境にやさしい行動とは
社会環境：非認知能力を高めるには

<レポートの流れ>

- 1,自然環境のテーマについて
- 2,社会環境のテーマについて
- 3,新たに気づいたこと
- 4,最後に

1,自然環境のテーマ「個人ができる環境にやさしい行動とは」

バーモント州では生ごみの堆肥化が義務付けられている事を事前調査で知りました。まず政府から環境保全意識が高いバーモントでは一人一人個人でできる環境にやさしい行動も日本よりできることが多いのではないかと。またそれは日本にとっても可能なのだろうか疑問に思い、実際に現地で調査しました。日本でも出来る環境にやさしい行動を3つ見つけたので紹介します。

<①マイボトルを持ち歩くこと>

日本に比べてアメリカマイボトル(タンブラーも含む)を常に持ち歩くことが多いと感じました。日本では学校や職場にしか持って行かないのが当たり前ですが、冷水機(ウォーターサーバー)が家庭外に殆どないのが大きな理由だと考えました。日本では学校や職場でしか見かけないですが、アメリカ、特にバーモント冷水機がほとんどの建物にあると気づきました。写真のようなものがどこにでもあります。無料で水を入れることができます。

基本的には口に直接水を運ぶ用、マイボトル用の二つが備わっている場合が殆どでした。日本にあるものは写真左側の様な冷水機しか見たことがなかったのでマイボトル用のものは日本にも欲しいなと思いました。

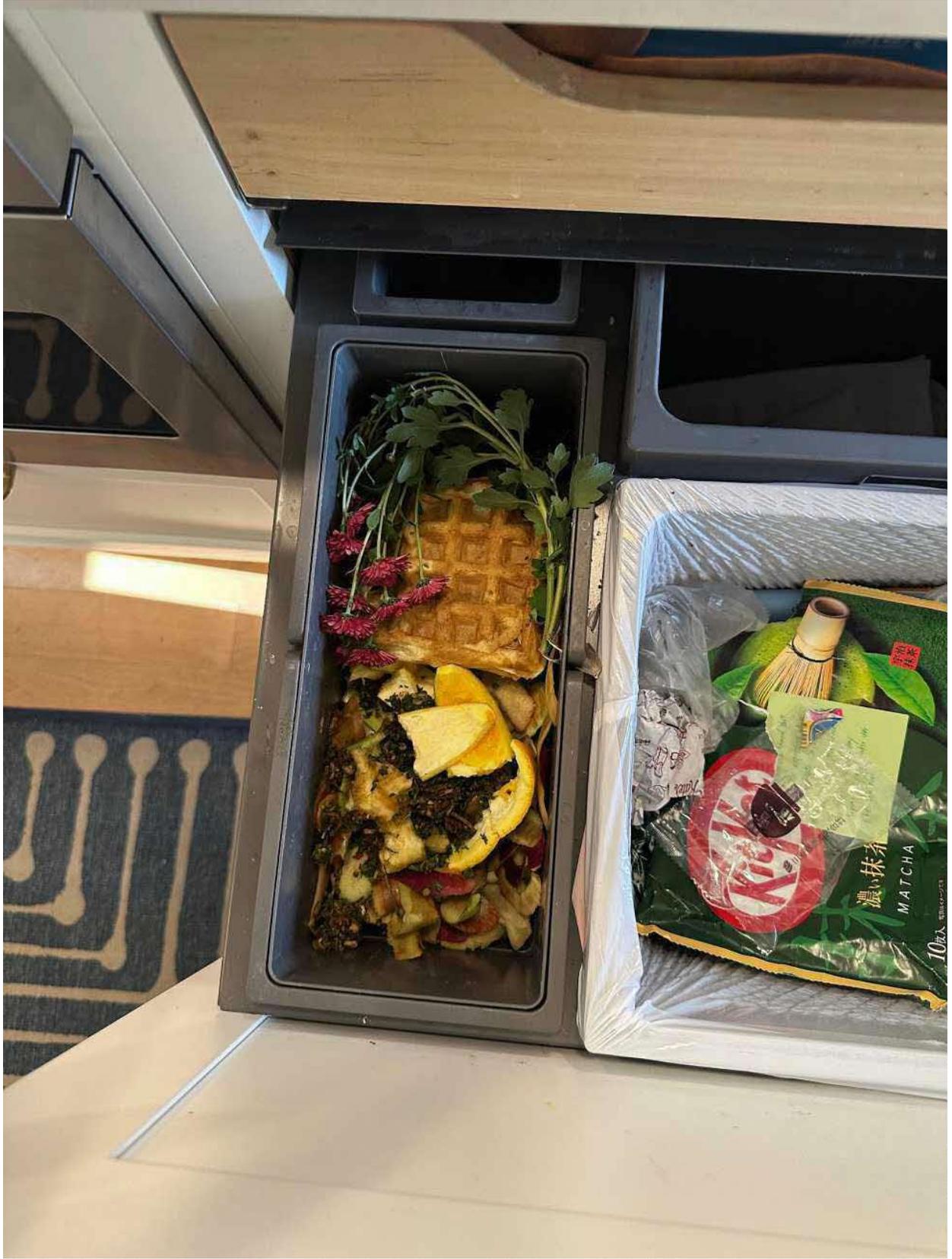
少し話が逸れる気がしますが、アメリカでは10代の中でマイボトルの流行があるそうです。ホストシスターはSTANLEYを使っていました。他の派遣生徒のホストシスターはowalaを使っていました。ホストファミリーには家族人数分のボトルがあります。せっかくの機会なので私も渡米2日目にバーモントでowalaを購入したのですが、ペットボトルよりは多少重いものの、節約にもエコにもなるなど心から感じました。

<②洗濯を回す回数を減らす>

バーモントでホームステイして1番驚いたことが洗濯を回す回数が少ない！本当に少ないです。10日間ホームステイさせていただきましたが、衣類の洗濯は1回、テーブルナプキンの洗濯も1回しか回していませんでした。バーモント大学のmarcelle melosira号に乗った際、大学生の方から洗濯を回す回数を減らすことでマイクロプラスチックが家庭から流れる量が減り、ジャンプレイン湖の環境保全になる事を教えて頂きました。また、乾燥機を使用せずに自然乾燥をすることも洗濯の回数を減らすのと同様、環境保全になるそうです。

<③自宅で生ごみ堆肥化をする>

日本は世界で最も多くゴミを焼却している国だそうです。私達にとってゴミを燃やなくて処理するのが当たり前になっていますが、その「当たり前」という考えを無くさなければ、環境にとって優しい生活をしていると言えないのではないのでしょうか？



バーモント州では生ごみの堆肥化(コンポスト)が法律で義務化されているため、どこの家庭でもこのようなコンポストの箱を見ることができます。学校の教室の中でも見る事ができます。日本では法律化されていないですが、鳥取県の中でも一部自治体はコンポストをする生ごみ処理機購入に助成金が出るそうです(米子市、倉吉市、岩美町、智頭町、八頭町、三朝町、湯梨浜町、日吉津村、大山町、南部町、日南町、日野町)。購入にまで及ばない人もおられると思いますが、生ごみ処理機の金額はピンキリなので是非ご自分に合った処理機を見つけてみるのはいかがでしょうか。バーモント程ではないですが、コンポストの一步を踏み出しやすい環境はあります！

2,社会環境のテーマ 非認知能力を高めるには

「非認知能力」とはテストでは測る事が難しい、性格や気質に関連する能力です。やり抜く力、自己肯定感、協調性、自制心なども含まれます。私は幼い頃から塾に通う日々を続けていました。テストの点が私の価値のようにも感じていました。ですが高校生になって弁論大会、高校生議会、グローバルリーダーズキャンパスなど様々な物事に自主的に参加していると「テストの点が全てではない。確かにテストの点は重要ではあるが、他にももっと重要な事があるのではないか」と考えて今回のバーモント州派遣事業で実際に肌で感じてみようと思いました。

これは事前に調べた内容ですが、アメリカでは非認知能力を伸ばすために「社会情緒的教育(SEL: Social Emotional Learning)」という取り組み(カリキュラム)があります。“A Vermont Portrait of Graduate”を参照するとSELに関する大切な事が沢山書いてありますが、長いので端的にまとめてみました。また、家庭でもSELは大切にされているそうです。

- ・集中、粘り強さを持つ
- ・自主的に考え、証拠や経験を元に意思決定する
- ・目標を設定し、それに向けて行動する

- ・自分の行動、選択が他者に与える影響について考える
- ・動画やデータを用いて世界の問題について考える
- ・社会的、政治的等の文脈における多様性を尊重するために生徒は母国語以外の第二言語を学ぶ
- ・メディア使用における境界線を設定し、安全・合法・倫理的に行動
- ・プロジェクトを企画し、リスクを取り、失敗を学びの機会にする
- ・新しい情報に基づき考えを変えることに前向きでいる
- ・情報の信頼性を自分で判断する
- ・自分自身の必要性を理解し、それを満たす
- ・批判的思考(Critical Thinking)を持つ
- ・能力は努力・機会・アクセスを通して伸ばすことができると信じる
- ・運動と食事で健康を維持する
- ・収入、支出の管理を自分でする

これらの知識を持った状態で渡米し、気づいたことについて述べます。

①学校



この写真は学校のアート室のような場所です。視覚から入る情報が多い！みんな自由に絵を描いている！新鮮！と思いました。「鑑賞」という雰囲気は無く、自分らしい絵を描いているような雰囲気でした。

フランス語とAfrican American Studiesの授業も受けたのですが、教室の写真が撮れてないです。アメリカの学校は先生一人一人が教室を一個一個持っていて、その教室に生徒が移動して授業を受けるようなスタイルなので教室の雰囲気も先生によって全然違います。教室の中の壁にはどこの教室にもBLACK LIVES MATTERの張り紙がありました。

少し話がそれますが、ホストシスターに帰国後聞いてみたのですが、Burlington High School(通称BHS)では第二言語としてフランス語、スペイン語、ラテン語、ドイツ語が学べるそうです。

ホストシスターが小学校の授業を見学するクラスを選択しているので私も一緒に参加しました。小学校ではセキュリティー上見学する高校生の待機室で携帯を携帯ボックスに置いて置くルールがあったため写真が撮れていないのですが日本と全然違う雰囲気でした。わたしの経験からの話になりますが、音楽の授業って言われてイメージするのは教科書を開いて先生の話聞いてみんなで一斉にリコーダーを吹いて、、、みたいな雰囲気です。でもアメリカの小学校はみんなで地べたのカーペットに円に座って先生達と童謡を手で叩いて音を鳴らしたり楽器を使ってみんなでやっていました。良くないことをした人にはみんなが見ていようときちんとその場で注意していたり、ミスをしてしまった子には「ミスしても大丈夫、続ける事が大事」と声かけていたのがとっても良いなと思いました。

学校には沢山の国籍の人がいてそれぞれが「自分」を主張しているように感じました。日本では混血の方だったり外国人だったりする人が自分の周りにいる事がアメリカに比べてノーマルではない事が多いので差別に繋がりがやすくなるのかもと考えました。

③家庭内

私のホストファミリーはスポーツ大好きです。見るのもするのも大好きです。ホストシスターはホストブラザーの影響で最近陸上を始めたそうです。小さな大会が週に一回、エリア内の高校合同で開催されます。

小さな大会にも関わらず、選手の家族全員が応援していたのに驚きました。



(ホストシスターDeliaのマラソン大会後。渡米2日目)

ホストファミリーはスポーツを見るのも好きだと言いましたが、特に野球とF1レースが大好きです。部屋でウトウト仕掛けていると上の階からよく叫び声が聞こえていました。



(University of Washington であったサッカーの大会。この時は家から遠く離れた大学に通っている双子のホストブラザーズも集まりました。)



(ホストファミリーのお家にあった結構大きめのトランポリン。Deliaと一緒に遊びました。)

アメリカでは44.5%程度の世帯が犬を飼っているそうです。私のホストファミリーもゴールデンレトリバーのMaybeちゃんを飼っていました。1日2回、朝と夜に散歩に行っていました。帰国前日に一緒に散歩に行ったのですが、結構な距離の散歩コースだったので運動量は十分確保できそうです。



④その他

・家

家族だからといってもちゃんと人と人としての距離が保たれているなと感じました。私のホストファミリーは家にシャワーが2つ、お手洗いは3つありました。一階にはゲストルームがあり、お手洗いと一緒に付いていて、私専用に使わせてくださいました。ホストピアレンツは1つの部屋で一緒に、子供は1人一部屋という感じでした、他の研修生徒の家もシャワーと部屋は生徒専用で使えるようにあるところが多かったです。

家事当番が小さい時から決まっています。写真を撮るのを忘れてましたが、冷蔵庫に当番表が貼ってありました。Delia(ホストシスター)はお皿洗いをやっていました。

・勉強についての会話

ホストファミリー、とくにホストマザーと進路についての話を沢山しました。共通テストのようなものはアメリカにもあるのか、勉強ってどのくらい日本では重要視されているのか等沢山話しました。そこでホストマザーから言われたのは「貴方は普段日本では沢山勉強してるように感じる。でも勉強が全てではないよ。ここ(アメリカ)でもそう。アメリカでも点数が大事って時もあるけど、それ以上に大切なことを学校や家庭でも教えるんだよ」と言われた言葉がグッときました。

* アメリカに行って気づいた、勉強以外に大事な事 *

アメリカに直接行ったからこそ気づけた、勉強以外に大事な事。それは幸せになる方法は勉強をすることだけじゃないこと。だけど正しい道の上にある幸せを選ぶために勉強をするという事。

もしかしたら「勉強」という単語を選ぶ事自体が良くないのかもしれないです。元々日本語は中国語を元にしてくるられています、中国語での「勉強」という文字には「～を強いられる」という意味があるそうです。なので中国では「勉強」という表現より「学習」という表現を使うのだとか。

勉強以外に大切な事は人によって異なるけれど、その大切なことを見つけるためには勉強では無く学習が必要。主体的に学び、知識を増やし、視野を広げることが必要。SELを元にして学習を進めていくことが大切なのではないかと考えます。

私は塾通いをしていたと述べました。これは「勉強」を指します。高校生議会や弁論大会、グローバルリーダーズキャンパスに参加する事は「学習」を指します。そして今回のバーモントの派遣事業も「学習」に含まれます。言語化する事は難しいですが、沢山のことを学ぶことができました。

3,体験したこと、知った事、気づいたこと

バーモントで体験させてもらったことについてです。

1、私の両親とホストファミリーとでビデオ通話

スクリーンショットを撮ったのですが、少し恥ずかしいので載せないことにします。20分ぐらい電話しました。ホストファザーが「今日1日はどうでしたか？」と私の両親に聞いたのですが、時差の関係でアメリカは21:30、日本は9:30でちょうど1日が始まった頃だったので父が「今日はまだ始まったばかりです」という会話が面白かったです。

2、アップルサイダーを飲んでみる

シェルバーン農場に行った際のホストファミリーに「アップルサイダーを飲んだ事がある？」と聞かれたので「ない」と伝えたらアップルサイダーを持ってきてくれました。「サイダー」と言われたのでりんごジュースの炭酸バージョンかと思ったらリンゴを絞ったようなものにシナモンを大量に入れた飲み物だったのが凄く衝撃でした。

3、物価が高くなってるのは日本だけじゃない

ホストマザーと物価の話をしました。「日本は2,3年前から物価が上がってきてる。アメリカは物価が下がってきてるの？」と尋ねたら「実はアメリカもすごく上がっている。トランプ政権になってから上がってきてる」と言われました。バーモントはトランプ政権を支持しない人が大多数だそうです。

4、ホストシスター、マザーと一緒にサッポロ一番を食べた

アジア物産店に行った時に「このラーメン日本でとても人気だよ」と伝えたらホストシスターが買っていたのでみんなで作って食べました。啜る事は難しいようですが、箸は全然余裕で使っていました。



(ホストシスターが食べている様子。直前まで私がお土産で持って行った折り紙を沢山作っていました。後ろの棚にあるものもです！)

5,至る所に動物がいる

道を歩いてたらリスは絶対にいます。住宅街には鹿が歩いてます。リスは本当にどこでもいます。日本でいうたぬきぐらいいます。

6,野菜が家庭まで運ばれる過程

日本は「農家→スーパー→家庭」が普通ですが、バーモントは「農場→家庭」とスーパーを仲介しないんです。農場と個人(世帯)が契約し、必要な分だけ取りに行きます。

私はホストファミリーとシェルバーン農場にアップルピッキングに行きました。他の派遣生徒達とも出会いました。りんごの丸齧りもしてみました。食べ切れなさそうな旨をホストファザーに伝えたら「投げ捨てて！これもコンポスト！」と言われました笑。

7,道や森、公園にゴミが全然落ちていない

日本もゴミが少ないとは言われているようですが、それでも良く目にします。特に高速道路、ゴミが落ちているイメージありませんか？私はあります。ところがバーモントでは本当にゴミが落ちていない。森や公園はもちろん、高速道路も全然落ちてない！もしかしたら環境意識の高さがバーモントの人達が気づかないうちに出ているのかも知れないです。

4,最後に

令和7年度鳥取県・バーモント青少年交流事業に協力して下さったすべての方々、受け入れて下さったGreen Across The Worldの方々、ホストファミリーに感謝を伝えたいです。

また、11日間の異国の地での生活を共にした派遣生徒と芽生さんとジェイミーさんに巡り会えたことにも感謝します。

いくらお金をかけても得れない経験をさせていただきありがとうございました。

語彙力が足りず、まとめる力もなく、伝えられているかは分かりませんが、今回のバーモント派遣では五感を全て使い、全てを吸収してきました。そのうちの少ししか書けなかったですが、それらが伝わると幸いです。

最後までご覧いただきありがとうございました。

<参考文献>

- ・「生ごみ処理機購入助成金制度[鳥取県]」

https://www.parisparis.jp/pdf/assistance_pdf/tottori.pdf

- ・「世界のごみ焼却ランキング 3位はデンマーク、2位はノルウェー、日本は？」

<https://news.yahoo.co.jp/expert/articles/0ea1e9f87759da0f78d2e8066846d16a6e69a05c>

- ・「Social Emotional Learning (SEL) and Mental Health Being」

<https://education.vermont.gov/sel-vt>

- ・「Social Emotional Learning and Health Standards 」

<https://education.vermont.gov/sel-vt/social-emotional-learning-and-health-standards>



鳥取県